

## 「魚と水」と私

永田 光博

魚と水が 50 号の刊行を迎えたとのこと大変うれしく思います。これも出版委員と先輩諸氏のご努力、そして読者の皆さまからの温かいご支援の賜物と深く感謝致します。

第 1 号が産声をあげたのが昭和 43 年 3 月、その編集後記に「当時は、昭和 42 年 4 月から、北海道さけますふ化場との併設を解かれ、本道内水面振興の中心機関として出発しました。これを機に、従来の“魚と卵”“内水面”の両広報誌を総合してより充実した豊富な広報誌として「魚と水」をお届けします」と書かれています（執筆者のイニシャルは K・H です）。昭和 27 年に北海道立水産孵化場として発足以来、当時は国からの委託を受けてさけます親魚捕獲事業を行っていました。しかし、この委託事業も昭和 41 年度で終止符が打たれ、内水面振興に力を注ぐこととなります。このことへの並々ならぬ決意が、この編集後記からも伺えるところです。しかし、実際には、さけます事業を手離した期間は短く、昭和 44 年度からはさけます資源の均てん化を図るため再びさけます増殖事業に関わることとなったのです。詳しくは、魚と水 41 号（記念号、平成 17 年）の「北海道立水産孵化場の歩み」（吉住喜好氏）をご覧くださいと思います。

「魚と水」に私が投稿した記事は必ずしも多くはありません。昭和 57 年に孵化場に入り、最初の赴任先であるえりも支場で書いた原稿「えりも支場におけるサケ稚魚の放流サイズの検討」（21 号、昭和 58 年）が最初です。この中でサケ稚魚海中飼育における開始時サイズとその後の成長パターン、そしてハナカジカによるサケ稚魚捕食サイズの検討を話題として紹介しています。えりもを含めた日高管内の定置漁業者は増殖事業に熱心だけでなく調査研究にも大変協力的でした。これは、えりも支場開場当初から現場主義を大事にされ増殖事業と調査研究を両立しながら業務にあたってこられた河村博氏（前場長）の影響が大きいと感じています。その河村氏から引き継いだ大事な研究課題であり、私のやる気だけは一応伝わってきます。

その後の原稿は 5 年後で坂本博幸氏との共著で書いた「サクラマス卵放流」（26 号、平成元年）です。千歳川の支流である漁川の上流で砂利を掘りながら悪戦苦闘した卵放流の方法を紹介しています。サクラマスの放流は稚魚や幼魚を車で輸送放流するのが普通でした。しかし、サクラマスが天然産卵する場所は上流や支流であり、

浮上した稚魚が下流に分散移動することで川全体の生産力を無駄なく使うことができると考えたわけです。そのためには車輸送が困難な上流や支流へコストをかけないで運ぶ方法を考案しないとイケない。その答えが卵での放流でした。ここでは遊漁者でも漁業者でも簡単にできる方法を紹介しました。この卵放流では思わぬ発見もありました。北海道では雄の半分程度が川で成熟し（早熟雄）、残りの雄だけがスマルト（銀毛幼魚）となって海に下ります。これに対して雌は全てスマルトになって海に下ります。人工産卵床から自然に浮上した稚魚の移動を調べてみると、川に残る傾向のある雄は産卵場所近くに留まり、海に下る雌は下流へ広く移動しました。この発見を Journal of Fish Biology というイギリスの雑誌に投稿したところ、わずか 10 日で受理されたのには驚きました。これも研究の楽しみの一つです。

次の原稿は「促成スマルトを用いたスマルト放流」（29 号、平成 4 年）で、森支場で 0+スマルト（通常は稚魚から 1 年経過しないとスマルト(1+)にならない）をなんとか漁業資源に結び付けたいという当時の支場長であった岡田鳳二氏（元場長）を始め職員皆の力の入りようが文章から伝わってきます。0+スマルトに耳石と鰭切除の 2 重標識を施し海水馴致してから渡島管内の港から放流しました。沿岸に回帰する冬から春に職員総出で市場調査を実施、朝に森を出発し南茅部、榎法華、恵山、函館市場を回って森に戻ってくると夜の 9 時、10 時といった感じでした。それでも、鰭標識のサクラマスを発見し、魚を買上げて支場に持ち帰り、頭から耳石を摘出し、蛍光顕微鏡下で標識マークを発見した時の満足感はとても大きなものでした。

その次の原稿は「サクラマスを増やすには」（34 号、平成 9 年）で、サクラマスフォーラム'96 の講演会で報告した内容です。この当時は、サクラマス資源の増大に当场職員が一丸となって頑張っていた印象が今でも強く残っています。実際、この時期は大量の調査研究が行われ、その結果を事業成績書だけではもったいないと感じていました。しかし、研究報告書となると書く人間に限られます。そこで、本来広報誌である魚と水にサクラマス特集として膨大な結果を取り上げました（31 号、平成 6 年；35 号、平成 10 年；40 号、平成 16 年）。

最近では、場長就任挨拶として書いた「さけます内水面と人と生き物とのかかわり」（48 号、平成 23 年）、香

港でのシーフードサミットへの講演招待を受けて執筆した「第10回国際シーフードサミット参加記」(49号、平成24年)といったところです。

広報誌ですが、個人の掲載記録を並べてみると、そこに自分が関わった増殖事業や調査研究の活動履歴を垣間見ることができ楽しいものです。これからも当場の色々な業務を分かり易く漁業関係者や道民へ伝える広報誌として役割をしっかりと担えるように職員みんなで話題づくりに励みたいと思います。

せっかく雑誌の話をしたので、平成7年5月13日に設立された「魚と水の会」についても簡単にご紹介いたします。この会は旧道立水産孵化場とさけます内水試を退

職されたOB、OGの集まりで、会長は岡田氏、そして幹事長は今田和史氏(元研究部長)が就任されています。毎年、5月に定例の総会があり、私を含めた現役幹部にも声がかかります。今年も5月11日(土)に札幌の中村屋旅館で開催され出席させていただきました(写真1)。来年は20周年の記念総会ということもあり、旧道立水産孵化場があった札幌市中の島を流れる精進川(改良されてとても川らしくなったとのこと)を見ながら、思い出深い懇親会(会長私案)等も検討していくとのこと。現役組も是非参加してみたいはいかがでしょうか。

(場長:ながた みつひろ)



写真1 中村屋旅館で開催された「魚と水の会」(撮影者:今田和史氏)